

紹介

韓國の中國學研究の現状紹介

金 文 京

京都大學

一 はじめに

近年、中國學各分野の國際化にともない、特に韓國の中國學研究者と交流する機會がふえたことは、日本の多くの研究者が實感しているところではないかと思われる。中國大陸、香港、臺灣などでの國際學會で韓國の研究者と同席する機會がふえ、また日本の學會に韓國の研究者が參加し、逆に韓國の學會に日本の研究者が招待される場合も少なくない。このような活発な交流が實現したのは、もとより最近の東アジアの國際情勢の變化、とりわけ日韓關係全般の

緊密化が背景にあることは言うまでもないが、それと同時に韓國における中國學の活性化がその要因のひとつであろう。にもかかわらず韓國の中國學界に對する日本側の理解は必ずしも十分とは言えない状況である。

言うまでもなく、朝鮮半島は日本とならんで、あるいは日本に先んじて、古代より中國の文化を熱心に攝取してきた漢字・漢文文化圏の重要な一員であった。日本に傳わった中國文化のかんりの部分が、實は朝鮮半島を經由して日本にもたらされたことも大方の認めるところであろう。したがって近代以前の兩國における中國文化の受容と消化の状況には、共通點が少なくない。しかし近代以降、日本の植民地時代を経て、特に第二次世界大戰後の状況は、政治情勢の相違などにより日本とは大きく異なっている。この點を日本側が理解することは、兩國の今後の學術交流をさらに發展させるうえで重要であろう。

筆者は二〇〇九年より韓國の成均館大學校東アジア研究院の兼任教授を務めることとなり、この三年間、毎年ソウルにある成均館大で授業、講演を行うとともに、各種の學

會にも参加する機會に恵まれ、韓國の學界の研究狀況について一定の知見を得ることができた。ここでそのあらましを紹介することにより、日本の學界の參考に供することにした。今後の交流促進の一助となり、ひいては中國學全體の發展にいささかでも寄與することができれば幸いである。

二 韓國における中國學研究の歴史

1 朝鮮王朝時代——漢學時代

近代以前の王朝時代は、中國學というよりも、むしろ日本で言うところの古い意味での漢學の時代であったということができる（韓國には近代以前に漢學という用語はなかった）。中國との朝貢關係により、中國と直接かつ緊密な交流を行えたこと、また科擧の實施により、漢學の教育、またそれをなう階層が制度的な保障を得ていたことなど、日本と異なる狀況もあるが、中國を中心とする傳統的な學問體系の中で漢學の習得と研鑽、あるいは漢詩漢文の創作が行わ

れていたという意味で、日本の狀況と大きな違いはない。古代から中世にかけて、漢文を日本とよく似た方法で韓國語により訓讀していたことも、近年の研究によって明らかにされつつある。

ただひとつ指摘しておきたいことは、一四四六年のハングル創製により民族文字を獲得して以來、佛典と四書・三經（『詩經』『書經』『周易』）などの儒教經典をはじめ、杜甫の詩のハングル譯（『杜詩諺解』）などが作られ、中國古典の一般への普及がはかられたことである。漢文のハングル譯は諺解とよばれ、儒佛の經典や古典文學だけでなく、また法律、醫學などの實用書にも及んだ。この諺解は江戸時代の日本に傳わり、日本でも假名による諺解、國字解などを生んだが、漢文訓讀が盛んであった日本では主流とはならなかった。一方、韓國では、このハングル翻譯の試みは形を變えて現在にまで受け繼がれている。

2 植民地時代（一九一〇—四五）

韓國ではじめて近代的な意味での中國學が成立したのは、

日本の植民地時代からであり、その中心となったのは一九二六年に創立（豫科は二四年設立）された京城帝國大學であった。京城帝大の實質上の初代總長は、東京帝大支那哲學科教授、服部宇之吉（一八六七—一九三九、東大と兼任）であり、また關連學科として支那哲學科、東洋史學科、支那語學・文學科が設けられたが、その教授陣は、藤塚隣、高田眞治、加藤常賢、阿部吉雄（支那哲學科）、鳥山喜一、大谷勝眞、玉井是博、松田壽雄（東洋史學科）、兒島獻吉郎・辛島驍（支那語學・文學科）など、全員が東京帝大出身者、特に服部門下で占められ、明治以來の日本の新しい中國學がそのまま移植された觀があつた。

また中國關係以外の教授としては、朝鮮史の今西龍、末松保和、朝鮮語學の小倉進平、言語學の河野六郎、哲學の安部能成、そして『江戸文學と支那文學』（一九四六）の著で知られる日本文學の麻生磯次など錚々たる顔ぶれであつた。これら京城帝大で教鞭をとつた學者の戦後の活躍については、ここで述べるまでもないであろう。

なお創設翌年の一九二七年には、北京大學中文系出身で、

在學中に魯迅や周作人の教えを受けた魏建功（一九〇一—八〇）が中國語講師として招聘され、翌年まで在職した。魏建功はその後、一九四五年に臺灣にわたり臺北帝大の後身である臺灣大學中文系の教授となつたが、間もなく大陸にもどり北京大學教授に就任した。その後は漢字簡化方案の制定などで中心的役割を擔い、また文革中は江青の文學顧問的存在であつたことでも知られる。

京城帝大の學生には日本人と韓國人がいたが、韓國人は少數で、たとえば支那語學・文學科の卒業生は、一九四五年までにわずか九名にすぎない。そのうちもつとも重要で日本でもその名が知られているのは金台俊（一九〇六—四九）であろう。金台俊は一九三一年に支那語學・文學科を卒業、在學中から朝鮮における漢文學の研究に取り組み、『朝鮮小説史』（一九三三）、『朝鮮漢文學史』（一九三三）など先驅的な仕事を残し、また朝鮮語文學會（一九三二設立）、韓國史研究を目的とする震檀學會（一九三四設立）などの創立に加わつた。しかしその後は共產主義に共鳴、一九四五年解放直前に中國の延安に行き、歸國後、政治活動に身

を投じたため、一九四九年、南朝鮮労働黨事件に關連して處刑された。『朝鮮小説史』は安宇植氏による譯注（平凡社「東洋文庫」二七〇）がある。ただ同書の安氏解説で、金台俊を朝鮮文學科出身とするのは誤りである。

もうひとり卒業生ではないが、京城帝大にかかわった韓國人研究者に金九經（一九〇〇—五〇？）^①がいる。金九經は、一九二一年、京都の大谷大學に留學、鈴木大拙に師事、また當時、大谷大學で教鞭をとっていた倉石武四郎に中國語を習った。二六年に歸國したが、二八年には北京に行き、未明社に寄宿、そこで魯迅そして周作人に會っている。魯迅の日記の同年五月三十一日の項には、金九經が日本の塚本善隆、水野清一、倉石武四郎をともなつて魯迅を訪問したことが記されている。塚本と水野は、周知の如く京大出身の佛教學者、考古學者で、この時北京大學に留學中であつた。同六月三日には、金九經と魏建功の名がともに見えることからすると、金九經はソウル京城帝大在職中の魏建功と知り合ひ、それが北京行きにつながつたらしい。このころの周作人の日記にも金九經の名は頻出するが、これ

も魏建功の紹介であつたと考えられる。

翌二九年、金九經は北京大學の講師となり、朝鮮語と日本語を教えた。この時期、胡適とも交渉をもち、胡適が英佛からもちかへつた敦煌寫本をもとに『校刊唐寫本楞伽師資記』（一九三三）を出版、その後、舊滿州にわたり、滿州國立奉天圖書館に勤務、また奉天農業學院の教授となり、『重訂滿州祭神祭天典禮』などを公刊、特に遼代遺跡の調査に功績を残した。一九四五年解放とともに歸國、ソウル大學校圖書館の司書をへて、翌年、ソウル大中國文學科の初代教授となつたが、一九五〇年、朝鮮戰爭勃發により北に拉致され、死亡したと伝えられる。この人が生きていたら、その後の韓國の中國學の狀況は大きく變つていただろう。

3 解放後から韓中交樹立まで（一九四五—一九二）

一九四五年の解放、獨立によつて京城帝大は國立ソウル大學校として生まれ變つたことになつた。現在ソウル大は京城帝大との繼承關係を認めていないが、京城帝大時代の

藏書がソウル大圖書館に保存されているのをはじめ、実際には多くのつながりがあったことは否定できない。四六年、ソウル大學校人文大學（韓國では戦前の日本の制度が受け継がれ、大學校の下に單科大學が附屬する）に設けられた中國文學科の教授陣は、京城帝大支那語學・文學科出身（四〇年卒）の李明善と中國から歸國した金九經、丁來東、それにソウル大師範大學教授でやはり帝大支那語學・文學科出身（三六年卒）の車相轅が講師として参加しており、帝大出身者と中國からの歸國者から成っている。

五六十年代は、朝鮮戦争（一九五〇―五二）とその後の冷戦状況の影響で、社會全般に中國に對する感情が險惡であった時期であり、この時期に大學に設立され中國關係の學科は、私立慶熙大の中國語學科（一九五二）、國立韓國外國語大の中國語學科（一九五四）、私立成均館大中國文學科（一九五五）のみで、語學が主であった。六三年には韓國中國學會が設立され、文史哲全般にわたる研究者が結集、その後『中國學報』『國際中國學研究』などの學術誌を刊行し、また友好關係にあった臺灣（中華民國）の援助によ

り毎年國際學會が開催されるようになる。また六九年には韓國中國語文學會も創設されているが、全般に研究は低調であったと言つてよいであろう。

轉機となつたのは、七〇年代の日中、米中國交樹立に象徴される國際情勢の變化である。七〇年代以降、中國文學科設立のラッシュが起こり、高麗大（一九七二）、淑明女子大（一九七二）、檀國大（一九七二）、國民大（一九七三）、延世大（一九七四）、清州大（一九七五）、嶺南大（大邱、一九七五）、忠南大（大田、一九七七）、全北大（全州、一九七八）、全南大（光州、一九七九）、慶北大（大邱、一九七九）、朝鮮大（光州、一九七九）、仁荷大（一九八〇）、梨花女子大（一九八二）、漢陽大（一九八二）、京畿大（一九八四）、放送通信大（一九八四）、圓光大（全州、一九八四）、崇實大（一九九二）など、全國の主要大學のほとんどに中國文學科もしくは語學科が設けられた。

この時期の學界狀況で日本ともっとも異なっているのは、ほとんどの研究者が大學卒業後、臺灣に留學して學位を取得していることであろう。このため現在五十歳以上の研究

者もおおむね中國語會話に堪能で、臺灣との國交斷絶後も同門あるいは師弟關係を通じて臺灣の學界とは個人的に強いつながりが維持されているようである。

一方、日本の學界とは、ソウル大の車柱煥教授が京大に短期訪問されたなどを例外としてほとんど交流がなかった。これも當時の日韓關係の影響を受けたものである。ただし日本の植民地時代に教育を受け、日本語を解する人が多かつたせいもあつて、日本の研究動向、研究成果は、書物を通じて相當詳しく傳わっていたようである。『大漢和辭典』をはじめとする辭典や研究書に、この時期の韓國における海賊版が少なくないのは、その一端を物語っている。

4 韓中國交樹立以後現在まで（一九九二—）

一九九二年の韓中國交樹立は、東西ドイツの統一、ソ連邦崩壊など冷戦の終結を告げる一連の出來事の東アジアにおける一事件であつたらう。この時期、大學の中國關係學科設立ラッシュにはさらに拍車がかかり、現在では全國一

七九の四年制大學中一一九の大學に一三八の學科（専任教員五名以上は十七校）があり、二年制短期大學一四五校中六二校にも關連學科が設けられ、毎年五六千名の卒業生を輩出している。現在、大學などに在職する中國學の専門家は、概數で文學がおよ九百名、語學が五百名、歴史が四百名、哲學が二百五十名程度で、うち四十%が女性であるという。東洋史の強い日本にくらべると中國史の研究者が相對的に少なく、女性の割合は日本よりずっと高い。

そしてそれまで臺灣に留學していた研究者が、國交樹立を機に中國大陸に留學先を切り替えたことは言うまでもない。現在、中國大陸各地の大學における韓國人留學生の數は、おそらく日本人留學生を凌駕するであろう。これにともない中國大陸の學界との交流も急速に活發となり、中國で開かれる各種國際學會に韓國人研究者が積極的に参加するようになったことはむろん、中國人研究者の招聘にもきわめて熱心で、韓國の大學で一二年の任期で教鞭をとった中國人研究者の數は、日本に教員として招かれた中國人研究者の數をはるかに上回る。また民間の資金によって運営

される韓國高等教育財團の支援により開催される北京フォーラム（北京大と共催）、上海フォーラム（復旦大と共催）、豆滿江フォーラム（延邊大と共催）など、そこで扱われるテーマは中國學を越えて東アジア全體におよぶ場合が多いが、このように自國からの資金提供によって中國で國際學會を開催するという形態も、日本ではほとんど見られない。

この時期のもうひとつの目立った現象は、分野別學會の創設である。古典小説、戯曲、現代文學、文學理論など多くの分野で、その規模に應じた大小の學會が設立され、學會、研究會の開催、學會誌の刊行など活発な活動を展開、また分野別での中國との交流を行うようになった。これについては付録の資料を参照されたい。日本でもむろん同様の現象が見られるが、筆者の印象では、韓國の學會の方がより求心力が強いようである。その理由は、八十年代まで韓國では中國大陸の書籍輸入が禁止されていたため情報が入らず、特に中堅の研究者たちの間に自らの後進性に對する自覺と危機感があり、團結してその分野の研究を發展さ

せようという氣持が強いためである。たとえば日本では國際學會への参加は通常、個人単位であるが、韓國では學會単位である場合が多い。なお全分野にわたる全國學會もこの時期に數がふえているが、これは各主要大學がこぞつて自校中心の學會を作りたがり、大同團結が難しいためであるらしい。これはお國柄であろう。

この時期には日本の學界との交流も盛んになった。個人レベルでの相互往來がふえたことは言うまでもないが、ここで特に紹介したいのは、語學研究者による韓日中國語言國際研討會である。この會は青山大學の遠藤光暁教授と漢陽大學校の嚴翼相教授を發起人として、第一回が二〇〇五年ソウルで、第二回が二〇〇七年東京で開かれ、二〇〇九年の第三回は中國人研究者も加わり、中韓日中國語言國際研討會と名稱を變え、中國威海市の山東大學で、二〇一一年の第四回は臺灣の中山大學で開催され、『韓日中國語言學研究系列』『韓漢語言學研究系列』と銘打って、すでに三冊の論文集が刊行されている（いずれもソウルの學古房刊行）。このように日韓の研究者が協力して、中國、臺

灣の學界をも巻き込んで交流を行うという現象は從來見られなかつた新しい傾向であり、今後のあるべき交流のひとつの姿を示していると言えるであろう。筆者が會員である中國古典小説研究會も、二〇〇一年にソウルで韓國の中國小説研究會と共催で、「日本和韓國學者研究中國小説上の問題と觀點」をテーマに學會を開いたことがある。^②

三 近年韓國で發見された主要資料

韓國の中國學界が注目されるにいたつたもうひとつの理由は、近年、中國學關係の新たな資料の發見が相次いでいることであろう。以下、筆者の知るその主要なものを簡単に紹介したい。詳細については、それぞれ専門的研究がすでに發表されているので、それらを參考にしてほしい。

1 明・陸人龍著・陸雲龍評・刊『型世言』十卷四十話
(ソウル大奎章閣韓國學研究院藏)

『型世言』は明末の白話短編小説集で、中國ではすでに失われていたのが、一九八七年、フランス國立科學研究センター研究員の陳慶浩氏と臺灣東吳大學吳國良教授によつ

てソウル大の奎章閣文庫(現奎章閣韓國學研究院)で發見、あるいは再發見されたものである。と言うのも、本書の存在は韓國ではすでにそれ以前から知られていたのであるが、その價值が認知されていなかったためである。陳氏は、ほぼ同時期の白話小説集『三刻拍案驚奇』(別名『幻影』)三十回、および『別本二刻拍案驚奇』三十四卷中二十四卷が、實は『型世言』を利用したものであることを考證、小説史上におけるその價值を明らかにされた。臺灣中央研究院中國文史哲研究所影印本(一九九二)、朴在淵校注『型世言』(韓國江原大學校出版部 一九九三)北京中華書局標點本(一九九三)、江蘇古籍出版社『中國話本大系』標點本(一九九三)がある。

2 舊本『老乞大』(個人藏)

『老乞大』は高麗末期の中國語會話教科書として、『朴通事』とともに廣く知られたものである。ただし現存するのは朝鮮王朝時代の改訂版およびそのハンゲル譯(諺解)のみであったが、一九九八年、慶北大の南權熙教授によつて、高麗時代の原本と思われるテキストが大邱市で發見さ

れた。原本である確證はないので、筆者は便宜的に舊本とよぶことにするが、この舊本には元代おもに中國北方で使用されたと思われる、いわゆる漢兒言語の特徴が反映されている。

たとえば「恁是高麗人、卻怎麼漢兒言語說的有好？」のように、モンゴル語の影響による句末の「有」の使用などがその典型的な例で、改訂版では「有」は削除されている。また改訂版では「北京」としているところが、舊本では「大都」と元代の呼稱のままになっている。『老乞大』は、大都に行く高麗商人による會話を主要内容とするが、改訂版では賣買に銀が用いられているのに對し、舊本ではすべて元代通用の寶鈔（紙幣）が用いられている。寶鈔については、これまで多くの研究があるが、それらはほとんど制度運用に關するもので、實際の賣買の現場でそれがどのように使われたのかを示す資料は皆無に近かった。舊本『老乞大』には、それが具體的に活寫されており、言語史のみならず經濟史の研究においても貴重な資料である。

影印本に『元代漢語本老乞大』（慶北大學出版部 二〇〇

紹介

〇）、鄭光編『原刊老乞大研究』（外語教學與研究出版社 北京 二〇〇〇）、また譯注として、金文京・玄幸子・佐藤春彦編『老乞大』（東洋文庫）六九九 平凡社 二〇〇二）、鄭光編『原本老乞大』（朴文社 ソウル 二〇一〇）がある。

3 元刊『至正條格』殘卷（韓國學中央研究院藏）

『至正條格』は、元の至正六年（一三四六）に頒布された元代最後の法令集である。中國ではもと『永樂大典』に収録されていたが、すでに散佚し、黒水城（カラホト）發見の元代文書の中に、わずかにその殘葉が存在するにすぎない。しかるに二〇〇二年、韓國學中央研究院の安承俊研究员によって、慶州の舊家である孫氏所藏書の中から元刊本の殘卷が発見された。殘存するのは、「斷例」卷一一一三、「條格」卷三三三四の部分である。

元代の法令は、「斷例」と「條格」からなるが、これ以前に編纂された『大元通制』は「條格」の部分しか残っておらず（一般に『通制條格』と稱される）、「斷例」がどのようなものであるかについては、從來中國でも論争があった。發見された『至正條格』は「斷例」部分を含んでおり、こ

れによって「斷例」の性格が具體的に確認されたのである。また元代の法令集としてもっとも有名かつ大部なのは『元典章』であるが、本書には『元典章』や『通制條格』と重複する部分も多く、校訂に資するところが大きい。

以上は法制史上の價值であるが、本書の内容には文學、哲學の研究に關係するものもある。うちもっとも重要なのは、「隱藏玄象圖識」〔「斷例」卷二「職制」二二〕に見える元代の禁書五十種の目録であろう。従來、元朝は清朝と異なり文網緩やかで、禁書はさほどなかったと思われていたが、これによって元代の禁書の實態が明らかになった。特にそのほとんどを占める讖緯書は、關連分野の研究にとって貴重な資料である。そのほか所收法令には、元代に流行した演劇である雜劇の内容の背景を知るうえで参考になるものもある。

筆者とソウル大の金浩東教授、慶北大の李介奭教授の共同編になる『至正條格』（韓國學中央研究院 二〇〇七）に、原書の影印と翻字校注、および關連資料集、研究論文が収められている。

4 高麗末刊『金藏論』（梵魚寺藏、個人藏）

『金藏論』は、北朝末の釋道紀撰の佛教故事集で、日本では特に『今昔物語集』の典故として有名であり、大谷大本、興福寺本、京大本などの寫本が知られ、また近時、廣島大の荒見泰史氏によって敦煌寫本の存在も報告されている。本書は二〇〇二年、慶北大の南權熙教授によって發見、報告されたもので、『金藏論』唯一の版本として貴重であり、寫本との間には多くの異同がある。宮井里佳・本井牧子編『金藏論』（臨川書店 二〇一一）はその詳細な研究である。

5 朝鮮刊『新刊校正古本大字音釋三國志傳通俗演義』十卷（鮮文大中韓翻譯文獻研究所、ソウル大奎章閣韓國學研究院等藏）

本書は小説『三國志演義』の明末テキストのひとつで、南京の書肆、周曰校が刊行したものの朝鮮における翻刻本である。いわゆる周曰校には、中國社會科學院文學研究所の劉世徳氏によって、刊行時期がもっとも早く挿繪のない甲本、ついで挿繪のある乙本、丙本および現在はずでに傳

わらない丁本の四種があることが明らかにされている。^③朝鮮翻刻本はこのうち、もつとも早い甲本を底本としたものである。甲本は現在、中國社會科學院文學研究所に卷六・七・九の三巻のみが傳存しているが、翻刻本の方はいくつかの系統があるものの、合わせれば全十二巻すべてがそろっている。特に卷一卷頭の「晩學廬葉才音釋」は、他の巻およびその他のテキストには見えない。葉才については不明である。

本書の存在は、その一部が従来、韓國の學界では知られていたが、二〇〇七年に鮮文大の朴在淵教授が新たに発見されたものと従来のもを整理し、その影印および翻字に解説を付し、『新刊校正古本大字音釋三國志傳通俗演義』（鮮文大學校中韓翻譯文獻研究所 二〇〇八）として公刊された。ただし本書には、その刊行年代などいまだ未解決の問題が残されている。

6 朝鮮銅活字本『三國志通俗演義』卷八上下（李亮載氏藏）

本書も小説『三國志演義』のテキストで、古書収集家の

紹介

李亮載氏が所藏していたものが、二〇一〇年に公開された。高麗、朝鮮王朝時代に、おもに朝廷により銅活字本の印刷が盛んで、歴代多くの活字が鑄造されたことは廣く知られているが、本書はそのうちの丙子字、すなわち中宗十一年（一五一六）丙子年に作られた活字を用いて印刷したものである。丙子字はその後、いわゆる壬辰倭亂（一五九二）まで使用されたので、本書もその間の刊行と考えられる。

『三國志演義』の現存最古のテキストは嘉靖元年（一五二二）の序をもついわゆる嘉靖本であるが、本書はそれとは別のテキストに依ったものである。本書の最大の特徴は、嘉靖本が二十四巻、その系統を引く周曰校本などが十二巻なのに對して、各巻を上下に分けていることである。そのことは殘本卷頭に「卷八下」とあることよって知りうる（卷八上は卷頭部分がない）。そしてその内容は周曰校本の卷八、嘉靖本の卷十五・十六に相當するので、本書は全十二巻を各巻上下に分けたもので、あたかも嘉靖本と周曰校本の中間的體裁になっている。このようなテキストは從來知られていない。またその文字もおおむね嘉靖本と一致す

るものの、周曰校本や福建系統の別のテキストと同じ箇所もある。影印と翻字校訂および解説が朴在淵・金瑛編『三國志通俗演義』（學古房 ソウル 二〇一〇）に收められている。

7 朝鮮刊『十抄詩』二卷（ソウル大奎章閣韓國學研究院、高麗大、北京大學圖書館藏）・『夾注名賢十抄詩』三卷（韓國學中央研究院、ソウル大奎章閣韓國學研究院、韓國國立中央圖書館、日本陽明文庫藏）

本書は劉禹錫、白居易など唐代詩人二十六人、崔致遠、朴仁範など新羅詩人四人の七言律詩各十首を選んだもので、『十抄詩』という書名はそのことに由来する。無注本（朝鮮前期刊本）と夾注本（二四五二年跋）がある。編者は不明だが、夾注本の序によれば高麗前期の文人である。夾注は高麗後期の神印宗の僧、釋子山による。

本書の存在は早くから知られており、朝鮮時代の魚叔權『考事撮要』の慶州、宜寧の條など、またフランスの東洋學者モーリス・クーランの『朝鮮書誌』（二八九六）に著録されており、日本でも江戸時代に伝わっていたが（陽明文

庫に『夾注名賢十抄詩』が藏されているほか、北京大學藏の『十抄詩』はもと山本北山の藏書であった）、さほど注目されることはなかった。一九九五年、韓國の扈承喜氏が本書の中に『全唐詩』未收の詩があることに気づき、論文を發表した^④。

二〇〇〇年、韓國の全南大學に招聘された復旦大學の査屏球教授がこれに注目、ソウル大奎章閣所藏の寫本をもとに翻字し、内容、文字についての考證を加え、『夾注名賢十抄詩』（上海古籍出版社 二〇〇五）を公刊された。また二〇〇二年には、安承俊氏によって前記『至正條格』とともに慶州の孫氏所藏書の中から『夾注名賢十抄詩』の刊本が発見され、二〇〇九年に成均館大の林榮澤教授の解説をともなつて韓國學中央研究院より影印出版された。さらに本書の研究に取り組まれた立命館大學の芳村弘道教授により北京大學所藏の『十抄詩』と陽明文庫本の『夾注名賢十抄詩』が、『十抄詩・夾注名賢十抄詩』（汲古書院 二〇一一）としてともに影印出版されている。本書はこれまで知られていなかった唐・五代の佚詩九十九首、新羅の崔致遠の佚詩六首を含み、近年の唐代佚詩の發見としては最大規模の

ものである。また既存の詩にも異文があるほか、夾注所引の文献にも諸書の佚文があり、さらには日本の大江維時『千載佳句』との関連が注目されるなど、唐代文學およびその東アジアへの傳播を研究するうえで貴重な資料である。

8 『燕行録』

『燕行録』とは、明清代に北京に赴いた朝鮮の朝貢使節による旅行記録である。従来その一部は研究に利用されてきたが、二〇〇二年、東國大の林基中教授編『燕行録全集』（東國大出版部）三十三冊が影印出版され、利用が簡便になった。このうち日本に所蔵されている分は、京都大の夫馬進教授の資料提供による。その内容には中國の資料には見えない事柄も多く、近年中國の學界でもその價值が目されている。

ただし『燕行録』は膨大な數にのぼり、『全集』に収録されていないものも少なくない。特にハンゲルで書かれたものは、中國や日本ではほとんど知られていないが、中には貴重な資料がある。たとえば一七六五年（英祖四一年・乾隆三十年）の使節に隨行した朝鮮實學の大家、洪大容

（一七三二—一八三）がハンゲルで書いた『乙丙燕行録』^⑤には、彼が翌一七六六年（乾隆三十一年）一月四日、北京正陽門外の茶園でみた芝居（朱素臣『翡翠園』について、茶園内部の様子や上演形態についての詳細な記録がある。同様の記述は漢文で書かれた『湛軒燕記』（湛軒は洪大容の號）にもみえるが、ハンゲル版の方が詳しい。清代北京の茶園については、従来、李綠園の小説『岐路燈』（乾隆四二年成書）第十回にみえるものもつとも古いとされていたが、^⑥洪大容の記述はこれよりも十年早い實録であり、かつ記述もより詳細である。

三 古典翻譯院の出版・翻譯とデータベース

ここで中國學とは直接の関係はないが、近年の韓國における歴史的漢文文献の整理状況についても紹介しておく。その理由は、韓國でのこの方面の事業が、同じ問題をかかえる日本や中國にとつて、ひとつの参考事例となりうると考えられるからである。この事業を行っている中心的な存在は、古典翻譯院（舊民族文化推進會）という機關であ

る。民族文化推進會は一九七〇年に民間の財団法人として發足、二〇〇七年に古典翻譯院と名稱を改め、政府の財政的支援のもとに韓國の漢文文献の出版、翻譯、データベース化、および翻譯のための人材育成事業を行っている。

まず原書の出版としては、新羅時代から朝鮮王朝時代にいたる歷代個人文集の主要なものを、句讀を付して影印した『韓國文集叢刊』正編六六三種がすでに刊行され、續編五九六種が現在刊行中で、二〇一二年には完刊の見込みであるという。このほか、すでに影印のある『朝鮮王朝實錄』なども再刊されている。

次に翻譯としては、『韓國文集』として崔致遠『桂苑筆耕集』、李滉『退溪集』など七六種、一般古典として『高麗史節要』『東文選』など三七種、さらに『朝鮮王朝實錄』全卷、『承政院日記』の仁祖・英祖・高宗部分、『日省録』の正祖部分、また國學原典として『燕行錄選集』および日本への通信使の記録である『海行摠載』等が、翻譯出版されている。古典翻譯院という名稱からも知れるように、漢文文献の現代韓國語への翻譯こそがこの機關の主たる事業

であり、そのための専門人材の育成も行われているわけである。

さらにこれらの資料のうち『文集叢刊』一〇五四種、古典翻譯書二一〇種、『承政院日記』の仁祖・高宗部分、『日省録』の英祖・正祖部分、および『朝鮮王朝實錄』全卷原文と翻譯が「韓國古典綜合データベース」(<http://db.ikc.or.kr/ikcdb/mainIndexIframe.jsp>)として一般に無料で公開されている。これに同じく一般公開されている國史編纂委員會の「韓國歴史情報統合システム」(<http://www.koreanhistory.or.kr/>)を加えれば、韓國の漢文文献については、ほぼその全貌を把握できることになる。

中國には周知のごとく「文淵閣四庫全書全文檢索版」や「中國基本古籍庫」のような大型の檢索システムがあるが、その多くは有料であり利用には制約がある。一方、日本では近年、平安時代の漢文學、鎌倉室町の五山文學、江戸・明治期の漢詩など日本漢文の研究が盛んになってきているが、データベース化はむろん、原書の影印出版さえも利用者が満足できる状況では決していない。このことは日中韓三

國の漢文文献をトータルに考察しようとする場合の大きな障害となっている。次にその實例をひとつあげよう。

四 餘 談

冒頭で述べたとおり、筆者はこの數年、韓國の成均館大で授業を行っている。昨年は相國寺の僧、大典顯常が一七六三年（寶曆十三）に日本を訪れた朝鮮通信使の一行と大阪で交わした筆談記録である『萍遇録』を學生とともに講讀した。その中に次の一節がある。

余（大典）曰、貴邦現今以文學執牛耳者、以足下所取、其人爲誰？（貴邦現今、文學を以て牛耳を執る者、足下の取るところを以てすれば、其の人は誰となす？）

寔（李曇寔）曰、周非魚、安知魚？（周は魚に非ず、いずくんぞ魚を知らん？）

余曰、安非魚、非即周之語乎？（いずくんぞ魚に非ざらんは、即ち周の語に非ざるや？）

紹 介

大典が當時の朝鮮における代表的文學者を尋ねたのに對して、李曇寔はとぼけて答えない。「周非魚」云々は、言うまでもなく『莊子』秋水篇の莊子と惠子の有名な問答をふまえたものである。李曇寔は、「莊周（自分）は魚でないから、魚のことは分からない」とはぐらかしたのである。李曇寔が大典の問いに答えなかったのは、使節の正使などが貴族の兩班階級であつたのに對して、彼は身分の低い中人階級の通事であつたからである。これに對して大典は、「どうして魚でないことがあるうか、というのが莊周の言葉ではないか」と、さらに返答を迫つた。李曇寔は通事ながら教養人であつたので、このように言つたのであろう。

この一節を讀んだ時、ある學生が、「非即周之語乎」は「非とするは即ち周の語に非ざるや」と讀むべきではないかと質問した。この讀み方はむろん間違っているが、學生は納得せず、翌日自説を書いた質問狀を筆者のところにもつてきた。困つた筆者は、「非即乎」という言い方があるのだということを説明するため、用例を『四庫全書』で檢索してみた。そこで分かつたことは、「非即乎」と

いう言い方は、元以降、特に明人の文章に多く、宋以前にはないということであった。むろん検索のやり方を變えるか、別の検索システムを使えば、宋以前の用例もあるかもしれないが、大勢は動かないであろう。考えてみれば、これはおそらく「不就是嗎？」という口語を背景にした言い方で、唐宋古文には出現するはずがない。質問した學生は漢文學科の院生で、唐宋古文的漢文を主に勉強しているため納得できなかったのであろうと思ひ當つた。そこで次に前記「韓國古典總合データベース」を使って韓國漢文の用例を検索したところ、全部で百七十八の例はほとんど朝鮮後期に偏っており、特に洪大容と同じく實學者として有名な丁若鏞（一七六二—一八三六）の『與猶堂全書』に約五十例があることが分かつた。

これはほんのささやかな經驗にすぎないが、これによつても中國における文體の變遷とその韓國への影響の一端が、わずか數十分の間に判明したのである。このようなことはコンピュータ検索なくしては不可能であり、コンピュータ時代の新しい研究方向を示唆しているようにも思える。そ

こで今度は日本ではどうであろうかと思ひ、「雕龍——日本古籍全文検索叢書シリーズ」（凱希メディアサーピス）を検索してみたが、用例がない。ないのは當然であつて、このシリーズには江戸時代の漢詩集はあるが、文集は入っていないのである。これでは龐大な時間を使い、偶然に頼るのだけければ、用例を見いだすことは至難である。

ちなみに質問をした學生は、前記古典翻譯院の翻譯者育成プログラムをも受講しており、將來は漢文の翻譯要員を目指しているようである。彼が一字一句の解釋に拘つたのは、おそらくそのためであろう。韓國では自國の漢文文獻をすべて現代語に翻譯する計畫が國家プロジェクトによつて遂行されている。これは王朝時代からの諺解の傳統を受け繼いだものとも考えられ、その範圍は韓國漢文文獻のみにとどまらず、中國古典文獻にもおよんでおり、中には『太平廣記』の全譯など、日本では考えられない離れ業もある（延世大金長煥教授の個人譯、ただし王朝時代すでに諺解があつた）。

日本では從來、漢文は訓讀によつて讀解される傳統で

あったが、近年、學校における漢文教育の衰退もあって、訓讀により漢文が理解できる人の数は激減し、それにともない社會全體での教養としての漢文の地位も低下している。韓國のやり方には利弊ともにあるが、古典や歴史文獻の内容を一般に普及させるためにはたしかに有効であり、日本にとつても參考になるであろう。聞くところによると、日本でも近年人氣のある「チャンゲムの誓い」など韓流歴史ドラマが生まれた背景には、テレビ局の関係者がネット上で『朝鮮王朝實錄』など歴史文獻のハングル譯を讀んだことが大いに影響しているという。

本稿は、二〇一一年十月八日、九州大學で開催された日本中國學會第六三回總會における講演内容をまとめたものである。講演に際して、學會情報については高麗大の崔溶澈教授、古典翻譯院については同院の姜玉順氏から資料を提供していただいた。また全般にわたり成均館大東アジア學術院のWCUプロジェクト参加者からさまざまな情報をいただいた。この場をかりて感謝の意を表したい。

紹 介

〈參考資料〉

- 1 關連全國學會
- (1) 韓國中國學會（一九六三）『中國學報』（年二回）『國際中國學研究』（年一回）。
- (2) 韓國中國語文學會（一九六九）ソウル大中心『中國文學』（年二回）。
- (3) 中國學研究會（一九八〇）韓國外國語大中心『中國學研究』（年四回）。
- (4) 韓國中文學會（一九八二）成均館大中心『中國文學研究』（年二回）。
- (5) 中國人文學會（一九八二）全南大・全北大、全羅道地域中心。『中國人文科學』（年三回）。
- (6) 中國語文研究會（一九八八）高麗大中心『中國語文論叢』（年四回）。
- (7) 中國語文學研究會（一九八八）延世大中心『中國語文學論集』（年六回）會員二四七名。
- (8) 韓國中國文化學會（一九九二）前身は忠清中國語文學會（一九八五）、忠清道地域中心。『中國學論叢』（年二回）。
- (9) 中國語文論譯學會（一九九六）崇實大中心。『中國語文論譯叢刊』（年一回）中韓翻譯研究。
- (10) 大韓中國學會（二〇〇〇）前身は釜山慶南中國語文學會（一九八三）、釜山地域中心。『中國學』（年二回）、文史哲、語學、藝術、經濟、社會全般。會員約三百名。

- (11) 中國文化研究學會(二〇〇二) 淑明大中心。『中國文化研究』(年二回) 中國文化、文學、韓中比較文學。
- (12) 韓國中語中文學會(二〇〇二) 韓國外國語大中心 『中語中文學』(年三回)。
- (13) 中國語文學會(二〇一〇) 梨花女子大中心 『中國語文學誌』(年三回)。
- (14) 嶺南中國語文學會(一九八〇) 大邱の慶北大、嶺南大中心。『中國語文學』(年一回) *一九八二年に蘇東坡赤壁遊九百周年記念學會開催。

2 分野別學會

- (1) 韓國東方文學比較學會(一九八四) 韓中日越比較文學の研究。『東方文學比較研究叢書』(八五・九二・九七) 二〇一年に第一・四三回定期學術發表會開催。
- (2) 韓國中國小說學會(一九八九) 『中國小說論叢』(年二回)、『中國小說研究會報』(年四回)。
- (3) 韓國中國戲曲學會(一九九一) 『中國戲曲』(年一回)。
- (4) 韓國現代中國研究會(一九九一) 韓中間の文化藝術交流推進。『韓中言語文化研究』(年三回)。
- (5) 韓國中國文學理論學會(一九九二) 『中國文學理論』(年二回) 會員五七名。
- (6) 現代中國學會(一九九五) 學術研究を通じて對中各種政策の立案、諮問を行う。會員約二五〇名。『現代中國研究』(年

一回)。

- (7) 韓國中國散文學會(一九九五)。
- (8) 韓中人文學會(一九九六) 韓國學の振興と海外、特に中國への紹介、交流。『韓中人文學研究』(年三回)。
- (9) 韓國中國現代文學學會(二〇〇二) 『中國現代文學』(年四回)。
- (10) 韓國中國言語學會(二〇一〇) 『中國言語研究』(年三回)
- (11) 韓國中國語教育學會 『中國語教育斗 研究』(年一回)。

參考文獻

- 『韓國中國學研究論著目錄・歴史、哲學、語文學』(一九四五—一九九九)、金時俊編、奎、二〇〇一。
 - 『韓國의 中國語文學研究家事典』、조성환編、시날로지、二〇〇〇。
 - 『國內中國語文學研究論著目錄』、徐敬鎬編、正一出版社 一九九一。
 - 『二〇〇〇—二〇〇九 中國語文學年鑑』 趙寬熙編 二〇〇六—二〇一〇。
- 注
- ① 김시준(金時俊) 「魯迅이 만난 韓國人(魯迅が會った韓國人)」、『중국어현대문학(中國現代文學)』 13號、一九九七年十二月參照。

- ② 金文京「日本和韓國學者研究中國小說上的問題和觀點學會報告」、『中國古典小說研究』第七號、中國古典小說研究會、二〇〇二。
- ③ 劉世徳「三國志演義」周曰校刊本四種考論」、同氏『三國志演義作者與版本考論』（中華書局二〇一〇）參照。
- ④ 扈承喜「十抄詩」一考——『全唐詩』미수록작품을 중심으로（『全唐詩』未收錄作品を中心に）、『季刊書誌學報』第十五輯、一九九五。
- ⑤ 原文翻字は洪大容著『乙丙燕行錄』（太學社 ソウル 一九九七）、また現代韓國語譯として『산해관람기문음한손』로 밑치도다（山海關の閉ざされた門を片手で押し開く）』（돌베개 ソウル 二〇〇二）がある。
- ⑥ 廖奔『中國古代劇場史』（中州古籍出版社 一九九七）第七章「戲園演劇」參照。